

追記：広島大学生の事故発生率は同年代の人の中で高率であるらしい。

真に遺憾である。たった10日程前、霞地区構内で夕方、西日に眼のくらんだ乗用車が西向停車中のバスにかなりはげしく追突した。

撤去した段差があれば当然防げた事故である。事故をおこした者が、大学関係者でなかつたと安心する前に、どうして事故の発生を少しでも少なくすることに腐心しないのか、私は理解できない。（平成元年10月29日）



病院前駐車禁止地域内いっぱいの違法駐車、主に外来者の車と思われる

（左）

（右）

倒、徐行が面倒、という“面倒くさい”ためのルール破りであり、誰でもがその可能性をもっている。すなわち、“面倒くさい”気持ちに克つてルールを守ることが安全のために必要である。

第2段の『注意する』ことでは“注意の配分方法”と“注意の濃淡”が重要である。上手な運転と下手な運転の一番はっきり現れるのがこのポイントである。いつも自分の車の周囲360°方向一様に注意を配分するのではなく、前方、右、左、後方を、場所と状況に応じて順序、濃淡を判断して注意の配分を瞬時に適切に行うことが安全確保のため重要である。

また、歩行中も運転中も自分と関わりあいそうな他の車が、少しでも不自然な走行の気配を示したら直ちに用心することも大切である。その車はパンクでハンドルをとられかけているとか、「酔っぱらい運転とか」居眠り、未熟、かもしれない。車の運転中はすぐ前の車に濃い注意を払うのは当然であるが、前の前の車と後方の車にも応分の注意を払うことが必要で、殊に“車間距離”をあけない後方車の意図——追い越したいのか、横着か、車間距離の重要さを知らないのか、いたずらか——を読み取って早目に対応すべきである。ただし後方に注意を奪われ前方がおろそかになるようではその方がずっと危険度が大きい。

第3段の『“他”を思いやる』ことは“他者”あるいは“他車の意図”を知り、適切な対応を取ることである。そうすれば“他”をいらっしゃせることなく、ゆとりと安全の確保につながる。右折のウインカーを曲る直前に出したため直進の後続車がよけられないとか、右折待ちをするとき、もう20cm中央線に寄れば後続車が直進できるのにそれを配慮しないとか、行儀の悪い駐車で2台分のスペースをとることとはやってはならない。

“他を思いやる”ことは時に責任を生じる場合がある。たとえば信号機のない横断歩道の直前で止まり、横断者に横断をうながすようなとき、後続の車やバイクが自分の車と同じように道路横断歩道の前で止まらないため事故になることがある。これは特に交通渋滞のときに多い事故であり、法的責任はなくとも自責が大きく残る。

運転の極意は『過不足ない、タイミングの良い操作がスムースに行われ、誰が見ても安全で、不安感を伴わない』ことである。それは剣道や茶道、あるいはテニス、バスケット、スキー、スケート等、スポーツの極意につながると考えられる。

現代の交通は自転車のドライバー、歩行者に対しても、かなり高度の交通技術を要求していると考え、油断しないことが肝要である。

最後に不幸にして事故に遭う瞬間、たとえ1/10秒であっても、より安全な操作と姿勢に努力して生死を分けた例もあるといわれている。どんな瞬間でもベストを尽くす意志は平素より心がけるべきであろう。

また、『任意保険』の加入は重要な項目である。最近の事故の補償はとても個人の能力の範囲ではなく、はるかに大きい。事故を起こせば本人のみならず、親兄弟、一家が経済的にもかなり長期間、莫大な負担を強いられる。事故を起こしそうにない者にとって任意保険はまさに“ばかりしい”と感じることもあるが、万一のことを考え、本学学生の全ドライバーはこれに加入することを強くすすめる。

昭和62年4月8日発行の工学部コミュニケーション87-1号に掲載されたものに若干手を加えて再掲するものである。